

# 520人が参加し研究成果を発表 第30回南東北連合学術学会開く

第30回南東北連合学術学会は、「文化の日」の11月3日(金)午前8時45分から郡山市の総合南東北病院で開かれ、県内はじめ青森県から首都圏までのグループ病院・施設から約520人が参加、日頃の研究成果を披露しました。

今回の学会事務局は南東北福島病院。開会式で同病院の浅利潤理事長特別補佐監兼執行本部長があいさつした後、N A B Eホールで一般(看護、リハビリ、介護、コメディカル)27演題、第5会議室で医師部門の9演題、大講堂でポスター16演題、合わせて52演題の発表が行われました。

発表持ち時間は、医師部門



業務経験や研究成果の発表に聞き入る職員たち

が8分、一般とポスターが5分。脳神経疾患研究所の吉本高志最高顧問らが研究内容や発表態度などを細かく審査した結果、「業務改善の有効性」(16ゼロ作戦の取り組み)を発表した総合南東北病院透析室の五十嵐留美さんが総合優勝。医師部門で「星状神経節ブツクの局所麻酔薬量はどこまで少なくできるか?」と題して発表した東京クリニックの木村信康医師が学術学会長の賞を受賞しました。表彰式に先立ち特別講演が行われ、厚生省老健局老人保健課の西嶋康浩介護保険データ分析室長が「超高齢社会における社会保障」と題して講演しました。

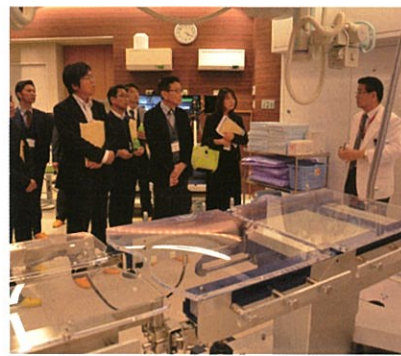


ポスター発表の会場も途切れなく大入り満員

## 最先端 BNCT 研究センターに関心 大阪南部の医療機関幹部らが視察

大阪府堺市など大阪南部地区の病院経営者や事務長ら医療機関の一行が11月10日(金)午後、郡山市の総合南東北病院を訪れ、南東北がん陽子線治療センターと南東北 BNCT 研究センターを視察しました。

大阪ガスが事務局となり医療機関幹部に全国の病院を視察して情報交換、経営の参考にしてもらおうと高井センター長から説明を受ける大阪南部の医療関係者ら



行っている研修会で、今回は最先端医療を展開中の南東北グループの戦略研修のため訪れました。大賀賢宏同ガス部長に引率された11医療機関の幹部は、N A B Eホールで南東北グループの諸橋泰夫人財開発部長からグループ概要の説明を受けた後、9年間ですでに4千人超を治療している陽子線治療センターを訪れ、ピンポイントでがんを治療する「体に優しい」治療の説明を受けました。次いで昨年から世界の病院で初の治験を実施中の BNCT 研究センターで高井良尋センター長から加速器を使ったホウ素中性子捕捉療法の説明を受け施設を見学。1回の照射で難治性のがん治療にも効果が期待される BNCT に関心を示していました。

## 看護の方向性を学ぶ がん診療連携拠点病院研修会

総合南東北病院のがん診療連携拠点病院研修会は、11月10日(金)午後5時半から同病院北棟 N A B Eホールで開かれ、市内の医師や看護師ら70人が看護の今後の方向性などについて学び合いました。



看護の今後の方向性などについて話す相馬さん

研修会では埼玉市民医療センターの相馬真貴子認定看護管理者・がん化学療法看護認定看護師が「スタッフと患者家族への関わり方について認定看護師の立場から」と題して講演しました。相馬看護師

は「患者さんの高齢化で、がんを含む慢性疾患や生活習慣病、認知症などが増え、看護現場では生命・生活の質の在り方が問われている。高齢人口は2055年に75歳以上が25%を超え、1人の若者が1人の高齢者を支える『肩車社会』の訪れが予測される。看護の将来ビジョンとして生涯にわたり生活と保健・医療・福祉を繋ぐ看護が看護職の役割となるのではないか。環境と人づくり、スタッフの教育などが大切」と指摘。疾病の予防や健康で暮らせるチームによるサポートが重要になる」と話しました。